

穴水町を訪問して

静岡大学情報学部 水野 歩美

能登半島地震の被災地の 1 つである穴水町を訪れ、女性のための防災セミナーや模擬店の出店を通して、私は多くのことを学ぶことができました。

穴水町の訪問前に読んだ防災に関する文献では、多くの方が様々な論説や考察をしていましたが、実際に被災地を訪れて、文献からは得ることができない多くのことを肌で感じました。

例えば、ある論文の中で、「震災から早く復興した地域は、地域内がとても活発であり人々の絆が非常に重要である」と記されていました。穴水町に行く前はそれがどういうことなのかイメージがつかめず、自分の中で釈然としていなかったのですが、実際にセミナーを受け、被災された方々やボランティア団体の方と交流を通じて、地震にあって家に閉じ込められたときや、1人暮らしで怪我をして逃げ遅れたとき、足が不自由で給水車までいけないときなどに、一番早く現場に駆けつけ救助活動を行うことができるのは近隣の地域住民の方々であり、近隣住民の方々との地域の行事や自治会などを通じた交流を活発に行っている地域ほど、人々が協力して復興まで支えあうことができるのだということが分かり、地域力というものがいかに大切なのか実感することができました。

最近では、近隣住民との交流が希薄になっていると思いますが、地域から孤立するということは復興から孤立するということと等しく、そういった意味では地域力を高めるための日ごろの努力や工夫が地域には求められているのかもしれない。

近隣住民との交流が希薄になること以外にも、多くの問題が防災や被災地の現場には残されています。

例えば、報道された被災地にばかり注目が集まり、他の被害を受けた地域には民間の寄付金もボランティアも来ないという非効率な現状、ボランティアを装った詐欺師や強盗仮設住宅の環境の悪さ、震災による引越しで一家離散、集落が崩壊、倒壊した建物によるアスベスト被害などです。

それらの中でも特に印象深かったものが、被災者とボランティアとの関係のあり方です。

ボランティアの姿勢によって、本来ならば支援をするはずが逆に被害者の方々の重荷になってしまったり、拒絶されてしまったりするのを知りました。ボランティアは、自己満足型の支援の仕方ではなく、支援を受ける側の被災者のニーズに沿って支援を行うことが本当の支援であるということ、また、被災者とよい信頼関係を築いていかなければ、満足のいく支援を行うこともできないのだということが分かりました。

私は震災などが発生した際、「有効に情報を共有できるような仕組みやシステムを開発できたら…」と想着ていましたが、自分は論やシステムの仕様にばかり気をとられ、一番重要な現場の声を聴いていなかったことを実感しました。

また同時に、実際の被災地を訪れて、防災の情報システムを作ることの困難さを実感いたしました。災害は怪我や建物の倒壊などの直接的な被害だけではなく、被害者の健康や生活など多岐にわたる被害を及ぼします。これらの新たな課題を元に最初から原点にもどって勉強をし、様々な角度から防災について改めて深く学びたいと今回の訪問を通して思いました。